関東大震災(2)

JR 東京駅は直線距離で、震源地に近い JR 小田原駅から 72.8 ㎞、JR 横浜駅から 27.3 ㎞です。

(因みに JR 大阪駅は直線距離で、北淡震災記念公園から 53.8 ㎞、JR 三宮駅から 27.5 ㎞)

当時は、東京市 15 区と東京府(東京市以外)に分かれていました。

(この表現でほぼ間違ってないと思いますが。明治元年(1868)東京府、明治 22 年(1889)東京府から東京市が分立、昭和 18 年(1943)東京都へ)

警視庁消防部は、6消防署に 824 名の常備消防員を置き、ポンプ自動車 38 台、水管自動車 17 台、はしご自動車5台、監督自動車、手曳ガソリンポンプ、オートバイポンプ各1台を擁していました。ポンプ自動車は各消防署、出張所、派出所におおむね1台ずつ配置され、当時の東京消防体制は、最新の技術を活用する国内最有力の消防組織といえる水準でした。消防部には市部消防組 40 組に 1,402 名の予備消防員も属し、120 台の手曳水管車を装備していましたが、彼らは江戸時代の町火消の流れを汲む鳶職人たちでした。

9 月 1 日は早朝から珍しく暴風雨が襲来し 10 時頃には一旦治まりましたが、風速 17m の南風が夕刻までに 3 回も風向きを変え烈風になり旋風を起こしました。東京市では地震発生直後から火災が発生、震災時の断水と火災の同時多発という事態は想定されていませんでした。凄まじく風下に飛ぶ火の粉が、その中を一団となって逃げ走る避難者の背や家財道具を満載した大八車の荷物に落ちて燃え出しました。9 月 3 日午前 10 時頃まで延々46 時間にわたり延焼し、日本橋区 100%、浅草区 96%、本所区、神田区、京橋区、深川区など東京市の 43.6%、34.7㎢が焼失しました。消防本部庁舎をはじめ消防庁舎 18 カ所、ポンプ車、はしご車など消防車両 23 台を焼失、殉職者 22 人でした。

大八車は、江戸時代から昭和時代中期にかけて人が曳いたり、馬や牛が曳いて活躍した総木製の荷車で、現在は道路標識にその姿を見ることが出来ます。

自転車以外の軽車両通行止め

道路が整備された明治時代以降に、全国各地で盛んに使用されるようになり、大正時代には大八車や馬車が物流の主な手段でした。名称の由来は諸説ありますが、車台のサイズが 7～10 尺程度のものまであったようですが、8 尺(約 2.4m)の荷車が多かったからか大八と呼んだようです。当時は大八車も登録制で、1923 年 3 月末現在の諸車保有台数(すべて約数)は、乗用馬車 5,500、人力車 111,000、荷積み用は馬車 285,000、牛車 55,000、荷車 2,219,000、自転車 2,812,000、二輪車 4,500、乗用自動車 10,000、荷積み用自動車 2,100 でした。大八車は荷車に含まれていると思われます。関東大震災では、各種電話は不通となり、道路は避難と家財を搬出する避難者で埋まり、橋梁は崩落や焼け落ちて通行不能となりました。大量の家財道具を積んだ大八車などが避難路を占領してしまったため、本来は防火帯となりうる大通りを越えて火災が拡大しました。

(荷台に家財道具を積む場合、まず大きく重いもの、形状がカッチリしている家具類を先に乗せ、上に段々と小さく軽い荷物を乗せていくと思います。逆の順番にして積む人はまず居ないと思われ、大部分の避難者の大八車荷台上部は、布団や衣類などで非常に燃え移りやすい状態になっていたのではないかと想像します。)

関東大震災では、本所区(現墨田区)横綱町の被服廠(ひふくしょう:軍服などを作る工場)跡で起こった大災禍がよく知られています。1922 年、東京市は、陸軍被服廠の移転に伴い跡地を買収し、公園の造成を進めていました。震災では、横浜よりも全壊住宅が少なかったので持ち出せてしまったと言われている家財道具を大八車に満載して、数万人が隅田川の東岸から上野や日比谷の公園に逃げようとし両国橋は大渋滞しました。出動した警察官だけでは荷物を捨てさせることもできず,「被服廠跡」へと

誘導せざるをえなかったようです。周辺の人も家から布団や家財道具を持ち出し、続々と避難してきました。2 万坪の空き地が避難者 4 万人と荷物で埋め尽くされすし詰め状態になりました。川幅 140m の隅田川をうしろに控えて、避難した誰もが安心しきり周辺の火災のおさまるのを待っていました。14 時頃にはジュースの売り子まで出ていたようです。16 時頃、大轟音と共に強風が来襲し、あおられた炎が持ち込んだ家財道具に火の粉をまきちらし、避難者の頭上に激しく巨大な炎の竜巻、火災旋風を巻き起こしました。人間はおろか自転車や大八車も上空へ巻上げられたと言います。一般的に火災旋風の風速は毎秒 10～100mと言われています。約 38,000 人が死亡、猛烈な風が吹き荒れたのは約 20 分間とも、19 時半まで続いたとも記述があります。

本所区相生警察署の報告は、被服廠跡の惨状を次のように伝えています。「被服廠跡広場 2 万坪の周囲は本所向島及び深川森下町に通じる電車路に接し、西方は広大なる安田財に隣り、先ず避難所としては最も好適な場所なり、当時避難民を概観するに其の数約 4 万人、家財の搬積山の如し。」「午後 4 時に近く風益々強力を加え到底避難民の取締に従事すること能わず（中略）、間も無く広場遥の東西方に当り一大音響と共に大なる黒雲柱の如きを認めたるが、強烈なる疾風は須臾にして宏壮なる安田邸を包囲せしが如き状況を感得す、同時に広場は家財の火事を起こして火の海となり、火炎は猛烈に避難民をなめ尽くさんとす、阿鼻叫喚修羅の巷とは真に此の事なるべきか（後略）」

最近になり、この火災旋風は地震後生じた広域大火災が原因であることが明らかになってきたと言われています。当時の気象条件が火災旋風発生の下地にはなっておりますが、広いと思っていた被服廠跡は周辺にその面積の数倍にもおよぶ広域火災域に四方を固まれていました。人々は自らの意志で、あるいは警察官に誘導されてそこへ避難してしまいました。現在は「都立横網町公園」となり、関東大震災による遭難者（約 58,000 人）の御遺骨を納める東京都慰霊堂があります。

震災直後の避難地調査に、当時とは戦争を経て、名称、区画、道路整備等で面積は変わっていると思われるうえ、公園や緑地は水面面積が含まれるため単純な比較は出来ないですが、現在のわかる範囲で面積（約、ha）を入れてみました。上野公園、日比谷公園、浅草公園も避難者の密度が高いです。どの避難地にも負傷者や病人も多数居たと思います。

震災直後の避難地調査（1923/9/1,2、人）　R4現在面積（約、ha）

上野公園	500,000	54
皇居外苑	300,000	115
芝公園	200,000	65
日比谷公園	150,000	16
浅草公園	100,000	18
小石川植物園	80,000	16
富士見町公園	56,800	
浜離宮	50,000	25
横綱町被覆廠跡	50,000	7
東京駅前公園	30,000	
虎ノ門公園	30,000	
清水谷公園	30,000	
麹町公園	30,000	
土手公園	10,000	
清澄庭園	10,000	
千鳥ヶ淵公園	3,000	4
半蔵門公園	3,000	4
計	1,632,800	

「日本公園百年史」日本公園百年史刊行会、　筆者作成

敷地面積 6.9ha（約 2 万坪）、野球試合時収容人数 4 万人のドーム球場がありますので、少し乱暴ですが、仮定の数値を用いて考えてみます。詳しい寸法が分かりませんので、八尺の大八車の外寸は八尺×三尺で両側に三寸幅の大きな車輪が装着されているとします。荷物が満載ですので大八車同士で重なる部分は無し、間隔もゼロで全てが同型の大八車であると仮定します。前記のドーム球場のフィールド面積を単純に割ると、4467 になります。

実際にはフィールドの形状、大八車の形状が影響し、また間隔がゼロで配置出来ないので、数％は少ない台数しか入らないと思われます。避難者 4 万人（左表内では 5 万人）の 10 人に 1 台の大八車と想定すると 4000 台です。球場のように通路は確保され固定椅子が効率よく配置された状態ではなく、混乱状態で大八車を伴った避難者がランダムに押し寄せた公園は、想像を遥かに超える高密度であったと思われます。来場者と木製品、布製品がほぼ無秩序に混在し満杯になった球場を想像して頂けたら 7ha に 4 万人が居る当時の状況を少しはイメージしやすいかと思います。

さて、被覆廠跡で発生した火災旋風は阪神淡路大震災でも発生したとされていますが、なぜ他の避難地で発生の報告がないのでしょう。火災旋風は風が強くても、弱くても発生しないようで、火災旋風の発生しやすい風速があるようです。火災が大規模になればなるほど炎がいろんな形をしているので、風が当たるときに火災旋風が起こる条件がどこかでそろいやすく、大規模な火災になるほど火災旋風が起こりやすくなります。これらの偶然が重なると発生することがあるようで、対岸正面にあった高等工業学校、隅田川、造成中で植栽がほぼ無かった被覆廠跡が風の通り道になり、そのことが影響したのではないかと考えます。しかし、未だ火災旋風の発生原理は一般化されていないと思われます。さらなる詳細な調査研究が行われることを望みます。

（つづきます）